

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

学園でWARSな青春を送りましょう

【作者名】

ラキスタリ

【あらすじ】

『戦争』：国家 もしくはそれに準ずる組織が軍事力・武力を行使し、作戦・戦闘 を組織的に遂行する行為および状態である。つまり、軍事力・武力を使用する外交の一種である。また、学科の一つでもある。現代とは少し違う、少し変わった世界。そこでは、戦争はある一種のスポーツのようなものだった!。この話は、農業校に入ろうと受験をした学生が、自分のミスで『戦争科』に入ってしまった様々なことを学んでいく物語。こんな青春、送りたいかったです。

1 戦目

戦争：国家 もしくはそれに準ずる組織が軍事力・武力を行使し、
作戦・ 戦闘 を組織的に遂行する行為および 状態である。つま
り、 軍事力・ 武力を使用する外交の一種である

また、学科の一つでもある

ああ、どうしたこんなことになったんだろう…

テスト用紙を前に、鈍く光る黒いモノを持った僕は心の中で激しく
嘆いた

カチ、カチ、と静かな試験会場に秒針が刻む音が響く
チラリと、前方にかかっている時計を見る

時刻は9時27分。受験開始まで、あと三分といったところだ

僕はごく普通の中学三年生だ。これと行った特技もないし、得意な
教科もない

平々凡々という言葉が一番似合う男だろう

そんな僕はここ『鈴川学園』の農業科入試会場にいる

はずだった

もはや僕の心境を埋め尽くす言葉は一つ

どうしてこうなった

そして、会場も緊張で埋め尽くされる

冷戦状態とはまさにこのことなのだろう。全員が全員殺る気満々
でにらみ合う

挟まれている僕としてはたまったもんじゃない

今すぐここから逃げ出したい衝動にかられるが、それも出来なさそう
うだ

チラリと、今度は二つある出入り口の方を見る

出入り口にはいかにも強面のお兄さん二人が立っている

しかもその手には銃……恐ろしすぎて逃げる気も失せる

そうこうしている内に開始まで残り一分をきってしまった、会場には更なる緊張感が流れる

本気逃げたい帰りたい。お家に帰してと大声で叫びたい。プライド？そんなものより平穩をください

カチャリと、誰かが鈍く光る物を握りしめる音がする

続いて、ガキンツ！と誰かが鈍く光る物を弄くる音がする

物は 僕は握っている物を見る。それは今ここにいる全員も握っている

の結晶の一つ 黒く、鈍く光る物。本来は人を殺めるために作られた、人類の叡知

銃

「それでは、始めてください」

そう、教師が言った時だった

人を殺める人類の叡知は、今

火薬の匂いと共に、弾を撃ち出した

と、同時に。目の前にあった机がひっくり返る

それが、開戦の合図だった
次々と長机はひっくり返し、一時的なバリケードとして弾を防ぐ
時に励ましの声が聞こえ、時に罵声が飛ぶ

そんな中、僕は何をしていたかという。ただ、呆然としていた
状況が一切飲み込めず、只々呆然としていた
そんな時、向こうの方で銃口がこちらに向けられるのが見えた

あ、これはヤバイ

そう思った時には、既に引き金は引かれていた

「何をやっているんだ!!」

そんな声が投げ掛けられたと思った時、既に僕はバリケードの中に
いた

目を白黒していると、目の前の一人の女子生徒がスゴい形相で僕を
睨んでいる

僕が何かしてしまったのだろうか？とりあえず、助けしてくれたであ
ろう女子生徒にお礼を言おう

「あ、ありがと」謝罪はいい！ 早く撃て！ 出来ないのであれば死ぬ
!」「...」

なんとも口が悪い子である。男勝りな子とはこの子のことをいう
のかもしれない

いやしかし、今はそんなことを気にしている場合ではない
向こうはこちらを倒す気で来ている
ぶっっちゃけここで倒れた方が早く済むのだが、それだと恐らく浪人
と化してしまうだろう

中学浪人なんて、死んでもゴメンだ。浪人になったら...

「趣味の一つも出来やしない！」

僕は教師に渡された銃を構え、引き金を引いた

ガウンッ！とその威力相応の反動が僕の全身を襲う。ハンドガンだから、そこまで反動は無いけどね

しかし、弾はあらぬ方向へと飛んでいき
名も知らぬ受験生の頭部に直撃、受験生はその場に倒れた

……………忘れてた、僕って銃はからっきしなんだった。ゴメン
ね、名も知らぬ受験生

僕は心の中で、そっと謝罪をした

「…銃もまともに撃てないのかお前はッ…！ もういい！ 下がって
る役立たず!!!」

何故か怒り狂っている女子生徒が僕を押し退け、銃を撃つ

何故怒っているのか、僕には理解の範疇を越えるけど…それにしてもスゴい

何がスゴいかって、命中率だ。彼女は撃った弾を全て相手の額に当てている

彼女の腕に驚くべきなのか、それとも狙いをつける早さに驚くべきなのか…とりあえず、驚いておこうと思う

そんな中。気でも狂ったのか、一人の男子生徒がナイフ一つだけ持って突っ込んでくる

こちら側の何人かで集中的に撃ちまくるが、当たっても当たっても男子生徒は倒れない

あ、言い忘れてたけど。武装は全て非殺傷で、当たっても死にはしないよ。ただ、気絶はするだろうけど

例えば撃っているのがゴム弾であるつと、当たれば気絶するぐらいの痛みはある

それを幾らか食らっているのにも関わらず気絶しない男子生徒はスゴいのか、ただ狂っているだけなのか、それはわからない

けど、このまま彼が来れば面倒なことになるのだけは分かる

だからと言って、僕に何が出来るはずもなく。僕は只バリケードに隠れていることしか出来なかった

やがて集中放火を受けた男子生徒は、奮闘虚しく、その場に倒れたお疲れさま

「後ろ貫ったあッ!!」

しかし、厄介事は次々と起こるわけで…今度は一人の女子生徒がこちらの背後から突っ込んでくる

銃は既に弾切れになったのか、手にはナイフ一本。先程の男子生徒と同じ感じだ

「ッー…チッ」

男勝りな子は即座に後ろを向いて、女子生徒に向かって発砲をする
しかし女子生徒はそれを近くにあつたバリケードに素早く入り込み凌ぐ。凌いだと思えばまた突っ込んでくる。ごり押しにも程がある

男勝りな子もそれに対応して脚を狙おうとするが…

カキンツと、虚しい音が響く

弾切れだ

「なっ… ！こんな時」…」

彼女は急いでリロードしようとするが、それよりも女子生徒の方が速かった

女子生徒はもう片方の手で持っているナイフで僕を切りつけようと振りかぶる！

…ってなんで僕!?

「っおおおおお!?!」

その手を降り下ろす前に、僕は女子生徒に突っ込む
とりあえず、動きを止めて周りの人に倒してもらおうと考えたからだ

「ッ！ チィ！」

女子生徒はナイフを振りかぶった手を一旦降ろして、懐から取り出した銃を僕に向ける

どうやら念のためにもう一個持っていたみたいだ。いやあ、一本取られたなあ。ハッハッハッ

笑えないよ

距離はもう一メートルもないかもしれないという時に、女子生徒は僕に向かって発砲する

「あっ…ぶなッ!?!」

まさに奇跡。なんと弾を避けれてしまった。撃った本人も、狙われていた(?)本人も驚いているが。一番驚いてるのは、避けた本人だと、声を大きくして言えるだろう

が、なにはともあれチャンスだ。今のうちに女子生徒を拘束しない

と

そんな僕の脳裏に、一つのヴィジョンが走る

「ッ!!」

体が勝手に動く

まず懐に潜り、伸ばしている腕を掴む

次に自分の足を滑らせるように彼女の足に当て、彼女を宙に浮かす
さらに、隙だらけの腹部に肘内をし、さらに浮かばせる

そして、彼女の腕を両手で掴んで、思いっきり投げ飛ばす!

投げ飛ばされた女子生徒は、向こうの方のバリケードに頭から突っ込み、派手に長机を壊した

……正直何が起こったか全くわからなかった。ただ、今の動きからは懐かしい何かを感じた

それにしても、あの女の子大丈夫かなあ…ちょっとやり過ぎたような気もするなあ…

「…お前」

震えたような声で、男勝りの子は呟く

どうやら無事だったらしい。けど、一応大丈夫かどうか聞いておこ

う

「あ。大丈夫? いやあ、さっきのは危なかった」

よ。と言おうとした時、彼女は僕の額に銃を突きつけた。それも、スゴい形相で

僕がなにかしたのだろうか、とりあえず体の震えが止まらないからその銃はしまっしてほしい

「……下がってると言ったはずだ…！ 銃もまともに撃てない奴が前線に出るな！」

「なっ!? あれは仕方ないでしょ！ 向こうが突っ込んできたんだから！」

「黙れ。避けることは出来たはずだが、どうやら貴様はそんなことも出来ない能無しのような」

カッチーン！ 頭にきた！ 今まででは女の子だって、そういう子なんだって我慢してたけど、今回は許せない！ 我慢なんて出来るわけがない!!

「な、なんだと！」

「もう喋るな能無し。貴様などと言葉の一つも交わしたくない！」

こ、こいつ…！

戦闘なんてほっというて、僕と彼女は、壮絶なにらみ合いを始めた

キーンコーンカーンコーン…

とその時。取り付けてあるスピーカーからチャイムが鳴り響く
こんな状況を体験したことなどないけど、そんな僕でも分かる。これはきつと、終戦の合図だ

バアンツ！と、扉が勢いよく開く音がする

驚いて出入り口を見ると、一人の男性が立っていた

「やあやあ初めましての子は初めまして、そうではない子はごきげんよう！ そして立って聞いている諸君、おめでとう！ 君たちは合格

だッ!!!」

は？

こうして、対して何もしていないはずなのに何がなんだかわからないうちに、僕は戦争科入試試験に合格してしまったのだった

これが、僕の災厄の始まりである

2 戦目

青い空、白い雲、そして頬を撫でる暖かい風が、僕に春の訪れと冬の終わりを告げる

学園中の桜はいつぱいに咲き誇り、僕たちに淡い桃色の幻想を見せてくれる

時折、風に揺られた花びらが、僕のいる体育館に、ひらりと落ちてきたりした

さらに、窓から射す日光が、僕たちに催眠術をかけているんじゃないかと錯覚させるほどに麗らかで暖かい

今日は最高の快晴だ

しかし、そんな最高の天気とは対象に、僕の心境は暗い曇天の夜だ。始終、どんよりしている

今日、4月某日。僕は入学し、高校生になった僕は鈴川学園戦争学科所属第22期生だ。…ハア

と、僕はテンションただ下がり状態で椅子に腰かけていた
思わず脱力して肩を落とすしガツクリとしたいが、このきっちりした姿勢を崩すわけにはいかない

なぜなら僕は最前線の椅子に座っているからだ。普通ならこういう場所は入試試験でスゴい結果を出した子が座るはずなのだが…なんで僕ここにいるんだろう？

正直なんでは分からない。考えても仕方ない気もするなあ…

「ハア…ん？」

ここで、ふと気のせいかな視線を感じた。僕は気になって見回る

しかし、自分と同じ制服の男女が前をただ見ているだけで、僕を見

ている人なんて誰もいなかった

(ちっきの視線はなんだったんだろっ……)

そう思っても、前を向かないと怒られてしまうので僕は前を向いて話を聞くことにする

立派な赤い絨毯が引かれた舞台には、教頭と思われる男が立っていたが

「それでは、学科長からのお話です」と言って裏側の方へ歩いていった
それと同時に、手を後ろで組みつつ一歩一歩堂々と歩いてくる成人男性が台の前で立ち止まる

丁度、学科長が挨拶をするところだったようだ

「やあ諸君！ おはよう！！ 私がッ！ この私がッ！ この学園の学科の一つ、戦争科の最高責任者！学科長だッ！ まずは入学、おめでとうッ！！」

初対面の時から思ってたけど、テンションが高い人だなあ…今の僕とは真逆だ…

「さて、私からの話だが…これといって固い話ではないッッッ!!! 諸君、自由に生活を送るといい！ 自由に学び、自由に戦い、自由に恋をしそして！ 自由に楽しむといいッ!! 私は、諸君らの自由を疎外などほしくない！ しかし!! 学園に所属している限り！ ルールは守ってもらおう

だが、そこら辺を説明するのは些か面倒だ。こっぴつこっぴつとは教頭君に任せるとしよう。諸君！ ようこそ鈴川学園へッ!!」

一気に捲し立てると、学科長は舞台を降りていった
……なんていうか、スゴい先生だったなあ…

スゴクテンションが高かったし…意外と適當そうだったし…
そう思っているうちに、教頭先生が校則について話している
覚えるのは少し面倒だけど、大人しく耳を傾けることにした

「仮クラス分け、か…」

入学式が終わり、僕は桜が舞い散る校庭で小さく呟いた

なぜ、クラス分けが仮なのかと言つと、それはさらに数週間後に『適
性試験』というある意味クラス分けに近い試験を行うからだ

その適性試験が始まるまで仮のクラスで過ごし、学校の雰囲気慣
れよう

というのが目的だと、僕は実践んでいる

まあ、僕の勝手な推測だけでもね

「さて、僕は何組かな？」

生徒がガヤガヤと騒がしくしている中心に、僕は足を進めた

しかし、生徒が多すぎてクラス表を見ることができない。それどこ
ろか、入る気すら湧かない

そこまで勇者じゃないんだよ、僕は

でも、入らなければクラスが分からないし。あんまりもたついでる
とHRに間に合わない

学校内で迷子にならないとも限らないしね

「よつと……」「ごめんね……」ちょっと行かせてね……はいはい、
通るよー……」

僕は人の塊を割きながら進む。流石に人が多くて中々進まないけ

ど…

「っと、やっと抜けれた…」

たった数メートル進むだけなのにこんなに疲れたのは初めてだよ

…

さて、僕は何組かな

僕は自分のクラスを知るために、クラス表を見上げた

Aクラス…違う。Bクラス…も違う。Cクラス…ああ、あった
あった

デカデカと一年三組と書かれたクラス表には、確かに僕の名前が書いてあった

名前に誤字もなにもない、何も問題はない
が、一つ気になることがある

「……………成績優秀者？」

何故、僕の名前の欄の隣に「成績優秀者！」と書かれているのだろう

…

…激しく気になるけど、そこはまあ、書いた本人であろう担任の教師に聞けばいいかな

さて、自分のクラスも確認したことだし。三組教室に向かおうかな
僕はいたる処に貼られている校舎の見取り図を一枚拝借して、三組の教室へ向かった

実のところを言うと、僕は戦争科になんて入りたくなかった

本当に僕が入りたかったのは農業科だ

理由は実に簡単、僕自信農業が好きだからだ

これは僕の祖父が農業をしている影響もあったからだと思う

僕の祖父は自然をよく分かっている人だった

空気や土の感じで、その日の何時に雨が降るかが分かるという天気予報士も真つ青な特技を持っていた

僕は、そんな祖父に憧れた。今思えば、昔の僕は存外爺臭かったなあ

とにかく、僕は祖父に憧れて七歳頃から祖父の手伝いをしていた

そんな僕は昔から心に決めていた事がある

農業校か農業科に入って、祖父のようになると

そう、心に決めていたはずなのに…

何の因果か知らないけど全く正反対と言っているいい戦争科に入ることになるなんて…

悔やんでも、悔やみきれない…

「……死んだお爺ちゃんに、申し訳つかないなあ……」

なんてことを、ポツリと呟いてみる

しかし、その時の僕は俯いて歩いていたので、前を一切見ていなかった

そんなことをすれば、当然

ドンッ

「わわっ!!」

「ととと!!」

誰かとぶつかってしまっ

僕は後ろによるける程度ですんだが、ぶつかった相手は音から察す

るにこけてしまったらしい
や、やってしまった…

「あたた……全く、前見て歩いてほしいんだけど？」

「す、すいません…」

僕は声をかけられて、初めてその人を視認した

まず、性別は女性であることが、顔を見る前にありあまる女性特有のモノで分かった

続いて、頭にはボンボン付きのピンクのニット帽を被っている

肌は普通の女子に比べ白すぎるくらいだ

顔立ちは、正直に言おう。美人である。テレビに出てきそうだ

彼女はよっと。と声をあげ立ち上がる

そこで、彼女の背丈に気づく

高校生…にしては小さい気がする。中学生っていつのがしっくりくる

彼女はこちらを足元から頭の天辺まで、ジロジロと見てくる

「って、君一年か…」

って、ジロジロ見てたのは学年を把握するためだったのか…

「あ、はい。これから仮クラス先に向かおうとしてたんですけど、考え事をしてまして…」

それを聞いた彼女はふうんとよくあるありふれた返事を返した

こんな学科だけど、案外普通の人は結構いるのかもしれない

「ま。次からは気を付けてな。じゃあ」

「す、すみませんでした……」

彼女は手を上げヒラヒラと手のひらを翻した

そつえばあの人が、僕とは制服の装飾の色が違ったけど……もしかして先輩だったりして……

……まさかね

それより、急がないとね

早く行かないと遅刻するかもしれないし

「……あれ？地図がない……」

道に迷ったり、間違えて違う階に行くなんてこともあったけどなんかCクラスに到着。教室に入ってまず最初に目に入ったのは『適当に座れ!!』と雑に黒板に書かれた文字

いや、確かに最初はそれが無難だろうけど、雑すぎる気もする……余程肝の座った先生なのだろう

さすが戦争科、どんな小さなことにも驚いてしまう要素が盛りだくさんだ

もう少しどんなものかを見回リたかったけど、入り口に突っ立っていても他の人の邪魔になるだけ

僕はさっさと適当な席に座ろうと思ひ教室を見渡す。が、少し遅かったのかどこもかしこも埋まっいて所々しか空いてはいなかった

仕方ない……フレンドリーな方ではないけど、少し挨拶をして座ろうかな

僕は適当に目をつけた席に向かい、鞆を置いて座った

窓側の席が空いていて助かった…中心の席なんてまっぴらごめん
だしね

しかし、隣の席には既に誰かが座っている。ただ、気になるのは、その
周りには誰も座っていないということだが…まあ、文句は行ったら
れない

さて、「」は挨拶をして「」からの学校生活を少しでも明るくしよ
う

「ええっと、隣の席だね。これからよろしく」

「ん？ ああ、そうだな…これからよろ」

あ

「ああアー!？」

「、こいつ！ 試験日の時にボロクソに言ってきやがった女!!」

「何故貴様が「」にいる!？」

「それは僕の台詞だ!」

あの時の恨みは、忘れたわけじゃない！

今「」で罵倒したおしてやる!!

と、意気込んだが

「」
「」……「」

周りの非難の視線をもろに浴びていることに気づいた僕と女は、周
りに一言謝罪をし、とりあえず座ることにした

「……それで？　なんでお前がいるのさ？」

「…私は貴様ののような無能な奴等の顔を見ないためにいち早く教室に来て座っただけだ」

ああ、だからこいつの周りは誰も座ってなかったのか。こんな奴の隣になんて座りたくないよね

座ってしまった僕は運がない、ということか

「…貴様こそ、何故ここにいる？」

「…適当に座ったらお前の隣だったんだよ。全く、運がないにもほどがあるよ」

「ふんっ、確認しなかった自分の無能さを他人のせいにしないでほしいな」

「……」

静かな睨み合い。互いの眼光を極限までに光らせ、相手を睨み殺す勢いの最悪な睨み合い

周りの人達が震えているように見えたが、今の僕達には至極どうでもいいことだった

今は、こいつをどうしてやるのかと考えているのだから…！

「おーおー、二気がいいね。青春してるかい？」

「!?」

バツと、同時に振り向く。そこには先程までいなかったはずの女性教師がいた

恐らく、このクラスの担任の人なのだろう

「元気なのはいいが、もうHR
ホームルーム

だ。少し抑えてくれるといいね

「…すみません」

「…申し訳ありません」

「うんうん。それでいいね。それじゃあHR始めるよ」

そう言って、女性教師は教壇の前に立った

荷物らしい荷物も持たず、仁王立ちで腕を組む

せめて出席簿は持ってくるべきだと思っただけだね

「おはよう！ 今日から私がこの担任を務めさせてもらう！ 一ヶ月という短い時間だが、よろしく頼む！ さて、呼び名に関してだが、君たちの好きにするといい。金○先生でもヤ○クミでもドラ○ン桜でも好きに呼んでくれ！ 何か質問はあるか？」

「せんせーい、著作権というものをどこ存じですか？」

「そんなものスクラップにしろ。他には何かないか？」

スクラップにしちゃいかんでしょ。ある程度は守りましょうよ先生…

「せんせーい、規制にかかりますよ？」

「伏せ字していれば問題ない。次」

伏せ字でもバレバレだよ

「せんせーい、なんでジャージなんですか？」

「着やすいからだ。スーツでなくて悪かったな」

チッ

「先生！スリースぐぼうツ!?」

「質問はもうないようだな。では今日はこれで解散だ。気を付けて帰れよー」

ある意味伝説の勇者のような行為をした男子にボディブローをかまして、先生は去っていった

なんていうか、ここの教師はスゴい人しかいないなあ…
学科長とか、学科長とか、学科長とか…

とりあえず、今ここで分かったことが一つだけある
それは

「いいか、ここから先には絶対に近づくな。いいな？」

「それは僕の台詞だこの漢女ー！」

僕の最悪の学生生活が始まったということだ…